



慶應義塾大学ビジネススクール

吉本興業（株）

沿革

吉本興業の基礎は、明治45年4月1日、吉本吉兵衛・せい夫婦が大阪・天満天神宮の裏門に面した一角で「第二文芸館」という、落語の寄席経営に乗り出したことに始まる。

明治の末期、大衆娯楽の興行といえば、演劇としては歌舞伎、寄席の演芸として落語、講談、女義太夫、浪花節などがあり、その他に相撲、見せ物、新興の活動写真などがあった。

寄席の経営に成功した吉兵衛らは、既存の小屋を買収して寄席のチェーン化を進めた。大正初期の同時期に成功した興行としては、阪急の小林一三が生んだ宝塚歌劇がある。寄席は次々と成功を収め、吉本が一時は大阪の寄席興行をほとんど占めるほどの勢いをもったが、落語は次第に大衆から飽きられてはじめ、吉本は次の売り物を探さなければならなかった。

そんなとき吉兵衛にかわって、せいを助けていたせいの実弟・林正之助は、落語のように枠にとらわれることがなく、自由奔放な笑いを巻き起こしていた新興の芸「万歳」(後の昭和初期に吉本が「漫才」に改称)にいち早く注目し、万歳を番組の中心にすえた。これが吉本の「花月」などの小屋で大当たりをとり、超満員の観客を集め、大成功をおさめる。昭和初期には当代人気の漫才師のほとんどが、吉本に所属していたという。

中でも大人気を博したのは花菱アチャコ・横山エンタツのコンビである。エンタツ・アチャコは、ドタバタ喜劇だったそれまでの漫才と違った、会話の掛け合いを中心とした「しゃべくり万歳」(今の漫才の原型)を創造し、有名な漫才「早慶戦」などで一世を風靡した。

昭和5年(1930年)は世界大恐慌のあおりで、不景気が日本にも訪れ、寄席の客足も大きく落ちた年であった。正之助は、この対策として木戸銭10銭均一という低料金の漫才専門館・南陽館をオープンする。南地花月の木戸銭は当

このケースは慶應義塾大学ビジネススクール助教授・山根節が公表資料および社長インタビューに基づいて作成した。(1997年5月)